慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉 (1975) 調査報告
Sub Title	The contents and construction of Shiokubi (1975) and its background
Author	小菅, 隼人(Kosuge, Hayato) 石本, 華江(Ishimoto, Kae)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.30 (2022/23), ,p.154- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要2022
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000030-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉（1975）調査報告

小菅　隼人
所員、理工学部教授

石本　華江
所員、講師（非常勤）

『塩首』の意義

《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉は、1975年10月10日より三日間、山形県鶴岡市稲生町番田にあった北方舞踏派稽古場で行われた。この公演において、土方巽は舞台に立つことはなかったが、芦川羊子の振付を行うために、激励をかねて鶴岡まで駆けつけ、ポスターには「大伽藍」と記されている。北方舞踏派のいわば旗揚げ記念公演であったから、ビショップ山田を制作・演出的立場としたが、舞踏手は、概ね北方舞踏派と大駱駝艦のメンバーによって構成され、客演メンバーはそれぞれのスタイルで踊りを披露した。当時、土方の薫陶を受けた前衛舞踏はしばしば「暗黒舞踏派」として一括りと見なされたが、その時の感想をビショップ山田は、次のように記している。「おそらく、麿さんと私が同じ土方門下のためそうひとくくりにされたものと思う。要するに世間では私達をおなじものと見ていたわけである。無理もない。暗黒で結構。が、ちょっと気にはなる」（山田、1992：250）。舞踏の開始を1959年の〈禁色〉*1だとすれば、16年ほどの間に、土方巽に影響を受けた舞踏者たちが、様々な分派となって活動をはじめ、独立意識が芽生え始めた頃である。その意味では、『アサヒグラフ』（1975年11月21日号）の言う「世界に冠たる我が暗黒舞踏派の祭司＝地獄の使者たちが一堂に会し、豪華ケンラン、悪夢のオールスター戦をくりひろげたのである」という文章において、「暗黒舞踏派」と一括りにしながら、「オールスター戦」と言っているのは、既にそれぞれ一家を構えた舞踏手たちが、いわばショーケース的に鶴岡に集結したということになるだろう。実際、この公演を見た市川雅は、評論「遊芸と祭事の間で――北方舞踏派『塩首』」の最後で、白桃房、大駱駝艦、ハルピン派、アリアドーネの会、彗星倶楽部をあげ、暗黒舞踏派が多様性への道を歩み出したことを指摘している（101）。〈塩首〉は、その分岐点にあった作品とみることができるだろう。これが〈塩首〉の第一の意義である。

この公演には、東京から多くの観客が詰めかけた。当時は現在のような飛行便や高速道路もなく、おそらく丸一日近くかかった列車の旅であったにもかかわらず、吉岡実も、市川雅も、地元客よりも東京をはじめ全国から集まった観客の多さに驚いている。多くの人たちは、公演終了後は、雑魚寝をして夜が明けると帰って行ったと吉岡は述懐している（吉岡、1987：87）。なぜ、それほど多くの人間が一回の公演を見るために、東京から鶴岡まで駆けつけたのか。マリリン・アイヴィ（Marilyn Ivy）は、大阪で行われた万国博覧会によって高度経済成長の集大成を迎えた1970年に電通と国鉄が仕掛

けた広告「ディスカヴァー・ジャパン」は、それまでの見物旅行としての旅を自分探しの旅へと変えたと分析している。それは若者世代が日本人のルーツへの逃避行をしようとした旅でもある。東北地方は明治以来、周辺地域、端的に言えば、典型的な田舎としてのイメージを持っており、成功した者が錦を飾る帰郷の地、あるいは、自然や温泉を満喫するための観光地としての団体旅行場所であったが、それが未だ知られざる深淵の地として対象化され、自分探しの場所として位置付けられたのである（Ivy, 1995：Chap 2）。市川雅も東京から地方に向かう若者たちの田舎への羨望を次のように指摘している。「彼等には地方への羨望があり、軽いノスタルジアがある。地方の土や自然に触れて生活したいと思っている。そして峠を越えればユートピアだったという幻想さえもっている」（市川、2000：97）。〈塩首〉の観客たちにとって、それは単なる舞踏の大イベントということではなく、地方に行くということに、自分たちの深淵にある何かを探しに行くという感覚があったのではないだろうか。この感覚のメルクマールとなったのが〈塩首〉であった。これが〈塩首〉の第二の意義である。

その自分探しの感覚は、公演者であるビショップ山田も同じである。ビショップは東京での舞踏活動と訣別をして東北に向かった動機を、東京での舞踏生活に心身ともに疲弊し、病院通いを続ける中、突如として「山の霊が私を呼んでいる」のを感じたと述べている（山田、1992：226）。ビショップが感じた山の霊力がどのようなものであったのか、おそらく本人でさえも明確に言語化はできないのであろうが、庄内地方の山伏修行について分析した町田宗鳳は密教と山岳修験との密接な関係を、両者とも、①祈祷の力を重んじること、②肉眼に見える現象として山川草木を生命の宿る実在の世界と受けとめること、③山を一つのコスモロジーとして宇宙的世界として捉えること、とまとめている（町田、2003：127-8）。また、美学美術史家の木下長宏は「北方舞踏派通信」のコラムに、舞踏は「展示的価値」よりも「礼拝的価値」にこそ本質があり、弥生時代の彼方にあった「呪詛の直截的な表現」が取り戻されなければいけないと述べる。単なる表現ではなく祈りとしての踊り、森羅万象に生命を認め意識的になること、自分の居る場所をコスモロジーとしてあらゆる多様性が充満している世界と見ることが、土方巽や大野一雄の舞踏に共通し、そして、ビショップの期待し目指したものではなかったか。市川雅は、土方巽と細江英公とのコラボレーションによって撮影された『鎌鼬』（1965年）について、風景の中を疾走することによって風景に身を沈めること、結果として、個性の没却によって自然の中で営まれている生死と一体化することを土方が目論んだことを指摘した「こうした状況にあって、土方は自身の背後にある世界に身を沈め、没個性的世界を生きようとしたのである。歴史の連続性は誕生と死という肉体の生成によって保ち得るのであろう。いかなる風景や歴史も肉体を通過して存在するのであり、この意味で舞踏家土方が自身の肉体に降りて行き、肉体と歴史や風景との出会いと相互侵犯に気がついたのは当然のことであったのかもしれない。出生という個体の歴史の探索の到着点は同時に個人を超えた風景の歴史を探る出発点でもあった」（市川、2000：94-95）。後に、鶴岡からさらに北方の小樽へと移った北方舞踏派にビショップ山田と雪雄子を訪ねた郡司正勝は、「どうして、こんな北国まできて、舞踏するのか」（郡司、1991：268）という戸惑いを感じつつ、「舞踏の北方志向性は、生の原体験に生きるため、死に向かう風土ではなかったのか。北方舞踏派の志向は、舞踏の声を聴くため舞踏の肉体を確かめるための旅ではなかったのか」（郡司、1991：269）と述べる。ここで注目するべきは“風土の中で確かめられる身体”を求めて、北方舞踏派は北への旅を敢行したということである。舞踏は、禅の用語を借りれば「身心一如」であり、肉と心を分けない。肉体表現という外面にこそ精神という内面が現れる。精神を肉体そのものの在り方と限りなく近づける。そうであれば、肉体との接点としての風土は、内面とも繋がっているはずだ。〈塩首〉の意義は、それが、（東京から遠く離れた）北方で行われ、北方に人を動かしたこと、北方という風土に単なる自分探しを超えた霊的世界観を見いださせたことに求められるであろう。これが〈塩首〉の第三の意義である。

この公演については、出演者は勿論、天沢退二郎、池田龍雄、市川雅、中西夏之、松山俊太郎、吉岡実ら、そこに立ち会った多くの舞踏家や文学者の文章が残されており、また Video Information Center [*2] による公演映像、さらに、準備や打ち上げを含めた記録映像も存在することは、1970年代の舞踏作品を総合的に捉える上で稀有な資料群である。本稿は、その作品の全体像について、この公演の中心人物であったビショップ山田の全面的な協力のもとに、構成、出演者、音楽について調査したものである。この公演は、先に記したように、「オールスター戦」的な意味合いがあったから、それぞれの舞踏手のパートはそれぞれのスタイルで表現されているが、“塩首”という一つの全体感を持っている。構成と細部を明確化することによって、舞踏のコスモロジーとして

の〈塩首〉を立ち現れさせることが本稿の目的である。

＊1《全日本芸術舞踊協会・第6回新人舞踊公演》〈禁色〉、1959年5月24日、第一生命ホール。

＊2 VIC（Video Information Center | 1972- 現在）は、70年代から80年代にかけビデオを用いて、多種多様なイベントの記録および実験的なテレビ放送（アパートでのCATV放送の試み「Paravision Ten」1978年）等を行った運動体である。

引用文献

『アサヒグラフ』1975年11月21日号。

市川雅、國吉和子編『見ることの距離――ダンスの軌跡1962～1996』新書館、2000年。

木下長宏「弥生の彼方へ」『北方舞踏派通信』、創刊準備号、1985年6月6日。

郡司正勝「幻容の道」『郡司正勝刪定集第3巻』白水社、1991年。

町田宗鳳『山の霊力』講談社選書メチエ、2003年。

山田一平『ダンサー』太田出版、1992年。

吉岡実『土方巽頌』筑摩書房、1987年。

Ivy, Marilyn. *Discourses of the Vanishing: Modernity Phantasm Japan*. Chicago: U of Chicago P, 1995.

『塩首』基本データ

出演：ビショップ山田、高橋光雄、南部満、神南天翔、蔵本悟、小島一郎、広沢巌、米辻文鳥、森繁哉、雪雄子、大妻たか（タカ）、熊谷日和、秋本（秋元）奈々子、森恭子、枝とも

客演：麿赤児（兒）＋大駱駝艦［天児牛大、大須賀勇、田村哲郎、室伏鴻］

芦川羊子＋アスベスト館、玉野黄市＋哈爾賓派

大伽藍：燔犠大踏艦　土方巽

音楽：山形交響楽団　指揮：村川千秋　編曲：後藤治

刷師：瀧澤修

日時：1975年10月10日、11日、12日

開場　17：30　開演18：00

場所：出羽三山（麓）　グラン・カメリオ道場

出羽三山麓　舞踏塾グラン・カメリオ　山形縣鶴岡市稲生町　貳拾番地四拾八號

客札：1200円

※チラシやパンフレット等で表記のゆれがあり、()内にして示している。

観客動員数：1500名（『北方舞踏派通信』創刊準備号1985年、2頁より）または1800名（山田一平『ダンサー』太田出版、1992年、255頁より）

ビショップ山田とは

ビショップ山田（山田一平、1948年2月17日-）は東京に生まれ、1968年～70年まで土方の元でダンサーとして出演する。1972年麿赤兒らと共に大駱駝艦を結成。1973年《燔犠大踏鑑公演［踊り子フーピーと西武劇場のための十五日間］》〈静かな家前篇・後篇〉に出演、同年には大駱駝艦天賦典式〈陽物神譚〉にて特別出演の土方とデュエットを行う。1974年山形県鶴岡市稲生町番田に北方舞踏派の稽古場として、舞踏塾グラン・カメリオを開く。1975年には《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉公演を行う。1976年北海道小樽市にシアター兼居酒屋「海猫屋」を開き、1977年北方舞踏派を母胎とした女性舞踏団「鈴蘭党」結成。1984年には土方による演出・振付にて、《北方舞踏派公演》〈鷹ざしき〉を上演する。1998年国立キーウ・シェフチェンコ劇場バレエ団に舞踏を振付、演出する。キーウ公演及び東京芸術劇場にて来日公演を果たす。その後2018年に山梨県甲斐市上福沢を拠点に舞踏宿ソコミ〔命名　故・田中基〕を開設。ラスコー洞窟の動物壁画を描いた人間達の心とイメージをモチーフに2022年までホワイト・ホリゾント芸術祭等にて3作品を上演、現在に至る。

北方舞踏派とは

1974年、ビショップ山田によって設立。東京で舞踏塾を開催し、山形県出羽山麓に北上して結成された。1975年〈ビショップ山田舞踏会―飛蝗王〉東北・北海道公演を経て、旗揚げ公演として《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉を行う。その後北海道小樽に「海猫屋」を開き、また「魚藍館」を新たに作り本拠地に据える。雪雄子を中心とした鈴蘭党、高橋光男、南部満（故人）、小島一郎、竹之内淳志といったメンバーと北海道にて積極的に活動を行い、1982年に東京へ拠点を移す。その後、田仲ハルも参加している。

北方舞踏派から独立し小樽に残った小島一郎（栗太郎）は1986年に「古舞族アルタイ」を立ち上げ、魚藍館を万象館と改名し田仲ハルも参加。また古舞族アルタイより派生した森田一踏と竹内実花による「偶成天」、また小島の弟子である秦かのこは台湾へ拠点を移し「黄蝶南天舞踏團」を結成する。1993年以降、雪雄子も青森へ移るが、北海道での舞踏活動は現在「北海道舞踏フェスティバル」等へと引き継がれ、またヨーロッパに拠点を移した竹之内の元では数多くの舞踏家が育っている。

また関西においても、大谷燠は白虎社および北方舞踏派に参加し、制作者としてトリイホールに、その後ダンスボックスを立ち上げた。大谷の元からは、きたまりなどが所属していた「千日前青空ダンス倶楽部」が生まれている。

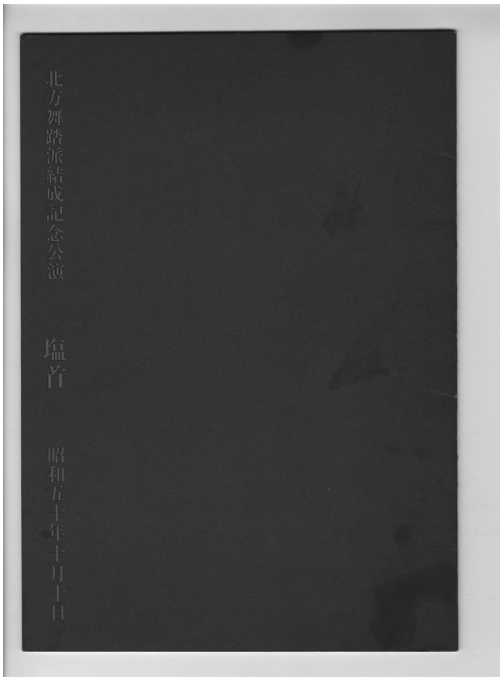
塩首とは

《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉は土方の監修を受け1975年に初演を迎えた山形での公演であり、前述の通りVICにより網羅的な記録が残されている。劇場への道中からリハーサル、打ち上げまでを含む記録映像は、当時の舞踏家たちのつながりを示す稀有な資料である。特に土方と出演者(大駱駝艦の中心メンバー達と芦川羊子、玉野黄市、森繁哉など)、また観客として参加した吉岡実、松山俊太郎等が、ビショップ山田を囲んで舞台について意見を交わす映像なども含まれている。2022年12月17日・18日には英国ケンブリッジ大学クイーンズ・コレッジにおいて、全編上演及び国際会議「The Social World of Butoh Dance: Screening an Unseen Performance from the 1970s」が開催された。詳細は「研究/研究会」、ポートフォリオBUTOHの報告を参照。

塩首関連資料

種別	資料名	作者	技法・素材・形状等	制作年	資料体名	ID
写真	「北方舞踏派」／「塩首」(稽古場の落成式か？)	新関昭男、加藤光洋	写真	不明	土方アーカイヴ	HP0001785-1811
印刷物	《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉チラシ	北方舞踏派	印刷物	1975		E_145
	《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉パンフレット（土方による書き込みあり）					E_273
	《北方舞踏派結成記念公演》〈塩首〉ポスター					EP70
音声資料	グラン・カメリオにて	アスベスト館	カセットテープ、音声データ	c.1974		HIJ_009002
雑誌記事	「稲穂の中の風魔一族」『アサヒグラフ』2714号（1975年9月19日）	居島克嘉	スキャンデータ	1975		M998
	「北方舞踏派の『塩首』を見る」『アサヒグラフ』2724号（1975年11月21日）	天沢退二郎				M121
	「風を犯す渇き―北方舞踏派の助走」『新劇』22巻8号（1975年8月）	衛紀生	記事コピー	1975		M497
	「ビショップ山田―異装するオリジン」『美術手帖』27巻401号（1975年12月）	伏久田喬行				M122
	「『おおー』と風だるまが座敷に…東北人の訪問」『週刊読売』34巻15号（1975年4月12日）	吉行淳之介				M115
	『北方舞踏派通信』創刊準備号(1985年6月6日)	北方舞踏派	スキャンデータ	1985		Z926
映像	北方舞踏派①　10／9　海・リハーサル	VIC	OS、映像データ	1975	VICコレクション	VIC_0083
	北方舞踏派②　10／9～10／10　酒・飯					VIC_0084
	10／10　北方舞踏派　リハーサル　食事　etc No3					VIC_0085
	10／10　北方　shiokubi　Oct9, 10 1975　No4 本番①					VIC_0086
	北方舞踏派　No.5　本番②　～芦川					VIC_0087
	北方舞踏派　No.6　芦川～北方　本番③					VIC_0088
	北方舞踏派　No.7　本番④　～ビショップ					VIC_0089
	北方舞踏派　No.8　酒・百日夜					VIC_0090
	北方舞踏派　No.9					VIC_0091

E_145



E_273

EP70

慶應義塾大学アート・センター／NPO 法人舞踏創造資源

塩首構成表①

北方舞踏派「塩首」						
分数	ｼｰﾝ	スクリプト	ディスクリプション	登場人物	注記	VIC 映像 ID
33′50″		00：00 ～ 車窓からの風景。ゴウゴウと激しい車体の音が入り込んでいる。撮影者か他の乗客のものと思われる話声がし、中には子供らしき声も聞こえる。幾度か「カチッ」という音とともに、海辺の家々、海のフォーカス、岩場、車内、浜と映りこむものが変化する。 03：03 ～ 暗転、リハーサル場面（テクニカルリハーサル）。両手に扇を持った芦川と照明に対し、ビショップにより演出の指示が出される。 04：43 ～ 4 人組（北方舞踏派）が頬をつまんだ状態から始まる場面。煙草を咥えながらリハーサルの様子を見る人物（芦川）にカメラが振られ、またすぐ舞台に戻る。 06：20 ～ 片足を上げながら床に座り、ゆっくりと倒れていく場面。音楽は前の場面と連続している。 07：30 ～ カエルのような体勢で首を激しく振る場面。演出から「もっと上げてく」と音量に指示が入る。 08：22 ～ ビショップ山田。 09：33 ～ 被り物をした 4 人組（大駱駝艦）が背面を見せて座り、体を炎が揺らめくようにゆらす場面。 11：44 ～ 天井の梁と音楽。 12：02 ～ 茶碗を右手に持ち、下着一枚で顔を正面、体は斜めに構えた集団（北方舞踏派）が踊る場面。 13：08 ～ 拡声器を持ったビショップ山田が直接舞台に上がって指示。 13：35 ～ 拡声器を持ったビショップ山田が舞台で実演し、特に光と音楽のタイミングについて入念に指示。 21：21 ～ 首から上だけが出た二人の人物（麿＋芦川）。「これで一回絞りますか」などと照明の確認をしている。 21：50 ～ 土方が舞台に上がって指示した後に舞台を下りる。蓋が下げられ、ビショップの顔だけが現れる。ズームされ、表情のみで表現が行われる。拍手がおこり暗転。 22：45 ～ 首だけ出していた演者たち（大駱駝艦）が、せりから出てくるように這い出してくる。そのままカーテンコールまでの流れを幾度も確認。土方による演出が行われる。 31：26 ～ リハーサルが終わった後、演者・演出それぞれに確認し合っている。光や動き出しのタイミングについての確認が多い。 33：50 ～ 映像終了	芦川羊子、北方舞踏派（女性 4 人：雪雄子、熊谷日和他）、大駱駝艦（麿赤兒、天児 牛大、大須賀勇、田村哲郎、室伏鴻）、北方舞踏派（高橋光雄、南部満、神南天翔、蔵本悟、小島一郎）、森繁哉、ビショップ山田によるあかりづくり、サウンドチェック、及びカーテンコールの流れを確認	芦川羊子、雪雄子、ビショップ山田、森繁哉、大駱駝艦、土方巽、熊谷門（音響）	当日リハ	VIC_0083_北方舞踏派①　10/9 海・リハーサル
33′22″		0：00 ～ 舞台の前に床に座る大駱駝艦のメンバーなど。会場に道具などが散らかっており、積んである荷物もある。 複数のカット。机を囲んでお酒を飲みながら話し合いしている土方、玉野、芦川、ビショップ、麿。途中から大雨になる。 09：45 ～ 飲食の場面が続く。松山、大須賀の姿も見える。背後に舞台を立てるスタッフが見える。トンカチの音が聞こえる。途中から照明をつける。森、室伏？が参加。帰る芦川、土方の姿。 17：37 ～ 玉野、室伏、天児がカメラに向かってポーズする。 18：00 ～ 机を囲んで食事したり、お酒を飲むビショップ、麿、室伏、松山、玉野、大須賀、天児、田村？。 20：20 ～ 外から建物を撮影。「北方舞踏派」の看板にカメラを寄せる。看板を気にする通行人の姿。「塩首」や日程等が書いてある看板もある。カットを入れ、建物の周りも写す。田舎の風景、建物。 22：50 ～ カットが入り、会場の建物を映す。トラックと人々の姿。「出羽三山麓」「北方舞踏派」ののぼり。 24：04 ～ 外で掃除する人々。工事の音が聞こえる。ビショップ山田も参加。 24：53 ～ 野原。ススキなどが風で揺れる。 25：13 ～ ミシンで作業する雪。 25：32 ～ 真鍮板？のようなものを運ぶビショップ。 25：52 ～ 田舎の風景。風で揺れる草。 26：28 ～ 室内から撮影。タバコを吸って休憩するビショップ、土方。 29：13 ～ 舞踏譜を確認する芦川。ビクター犬の置き物。 29：30 ～ 休憩中のビショップと土方に戻る。途中からレンズを変える。 33：22 ～ 映像終了	前日夜から仕込み		前日の夜から当日昼	VIC_0084_北方舞踏派②　10/9 ～ 10/10 酒・飯

北方舞踏派「塩首」						
分数	ｼｰﾝ	スクリプト	ディスクリプション	登場人物	注記	VIC 映像 ID
33′11″		00：00 ～ 部屋の中、食事のシーン（ビショップ＋土方）。お茶を出すビショップ山田。トンカチの音が聞こえてくる。 00：23 ～ 別の場面。正座しながら作業している二人の女性（雪）。（音は食事の場面から） 00：29 ～ 食事の場面に戻る。お茶を飲みながら雑談を男性。土方巽の秋田と後輩ジャワの話。背後に女性の声とミシンの音が聞こえる。 04：20 ～ 舞台の前に床に座って食事休憩している人々。マイクで音を拾う人。音楽が鳴り響く。カメラが会場の全体を撮る。 04：46 ～ 食事する男性たちのアップ。カットを挟み、上から撮影。ミルクコーヒーをやかんから入れる女性。男性の背中と頭にカメラを寄せる。 07：59 ～ 別カット。食事する人々（芦川、ビショップなど）。舞台の上で踊りを練習する森。途中から音が消える。衣裳を直す芦川。 09：15 ～ 音が復活。舞台の上にリハーサルが始まる。土方により踊りが直される芦川。 12：24 ～ 衣裳を着ている麿と後ろに土方。床に座ってタバコを吸う。 12：32 ～ 舞台上でリハーサルする男性5人組（北方舞踏派）。カットを挟み、玉野がリハーサルをする。 13：32 ～ 玉野のリハーサルが続く。照明を調整する声が聞こえる。 14：56 ～ リハーサルする男性と女性（雪雄子？）。 15：37 ～ 扇子を持っている芦川のリハーサルの様子。いくつかのカット。土方と芦川がきっかけなどを伝える。 17：04 ～ 振り付けを確認しながら、踊りを練習する女性4人組（北方舞踏派）。カットを挟み、指示を出すビショップ。大駱駝艦、北方舞踏派、ビショップのリハーサル。 25：46 ～ 機材とスタッフ。 25：55 ～ 楽屋で準備する役者。髪型を直す森。白塗りをする北方舞踏派。芦川が大駱駝艦の背中を塗る。タバコを吸う天児、麿。カメラマンが部屋全体を写し、役者に話しかける。 33：11 ～ 映像終了。	芦川羊子、北方舞踏派（女性4人：雪雄子他）、大駱駝艦、北方舞踏派（男性5人）、森繁哉、ビショップ山田によるリハーサル、白塗り開始	芦川羊子、雪雄子、ビショップ山田、森繁哉、大駱駝艦、土方巽	当日リハ	VIC_0085_10/10_北方舞踏派　リハーサル食事　etc. No.3
	1	北方舞踏派による公演の舞台裏。はじめに、広い座敷に人々が座り込み酒を飲みながら雑談している風景が俯瞰される。	客席に布団が敷いてある。車座になり話しているもの、眠りにつくもの、それぞれである。飲み会の様子。	土方巽、ビショップ山田、松山俊太郎、麿赤兒、森繁哉、吉岡実、天児牛大、大須賀勇、田村哲郎、室伏鴻、玉野黄市、カメラマン、芦川羊子ほか	初日打ち上げ	VIC_0090《北方舞踏派　No.8 酒・百日夜》
11′15″	2	場面が切り変わり、次に映されるのは小さな部屋での宴会の様子。土方巽、ビショップ山田、松山俊太郎、芦川羊子、麿赤兒、森繁哉、吉岡実、室伏鴻等、十人程度の演者や関係者が、ある者はソファに腰掛け、ある者は胡座をかきながら、酒を片手に賑やかに炬燵を囲む。話題は同日の公演の反省から、過去の思い出や結婚観、他の舞踏家による公演の批評、演者の批評に移り変わる。同時に、衣裳替えの難しさ等、舞踏にまつわる様々なエピソードも語られる。以下会話からの一部抜粋 10′45″-11′45″：「長期のあれの一つなんだなと思ってね。あの、驚きましたよね、今日は。まあ、今の奥さんもらわないとさ。よくなんか今ね。話が全部くだらなすぎる。そうだよ。そうだね。それを言っちゃえば、周りはみんな上手く行ったんだよ。ちょっといい加減。ちょっとみんな。性欲が発達してさ、ね。だって羊子と麿もさ、一緒に今ね、ぱっと結婚したって言ったらやっぱりこれすごい。痛いんですけど。そしたらなんのために結婚するのか聞きたい。まあ、結婚したらまずいだろうな、やっぱし舞踊家は。何しに来てんだ。美味しくともなんともないしさ。何しに来てんさ。あんたがた知るかいみんなさ。種があり過ぎだよ。あんたらが米粒だろ？それますね。それますね。」	北方舞踏派のメンバーが公演後の打ち上げに参加している。話題はその日の公演から逸れて、舞踏家の結婚について。座敷に胡坐をかく者、ソファに腰掛ける者、それぞれがぐるりと炬燵を囲み、酒を片手にそれぞれが自らの考えを自由に語り合う。カメラは、その様子を参加者全員の表情がわかるようにとらえる。			
22′29″	3	会話からの抜粋 21′59″-22′59″：「ところで出羽三山が、まあそれはですよ。玉はそれは気付かなかった。玉がさ、玉が蛙になってさ、ガッガッて出てくる。一人ずつあそこに移った方がいいかもしれないよ。今日はだけど玉が少し遠慮したような感じがするなあ。ちょっとねえ、あのアーティストユニオンだったな。厳しいぞ。アーティストユニオンだよ。それでさ知らない人があれさだけどさ、知ってりゃ、いつ出てくるかと思って待っているとそのまま引っ込んじゃったりするからさあ。相当頭のいい踊りだね。そうだよあのね。いいね澄ましてたけど。いやあ、いいなあと思ったよ俺は。こうやって隠してね、誰だよっつって。楽屋でもわかんないんだから舞台だったらね。」	北方舞踏派による公演後の打ち上げの風景。部屋で炬燵を囲んで談笑する参加者全員の表情をカメラがとらえる。話題は公演に参加していた演者について。画面右手の土方巽によって、身振り手振りを添えながらユーモラスに演者たちのエピソードが語られる。			

北方舞踏派「塩首」						
分数	ｼｰﾝ	スクリプト	ディスクリプション	登場人物	注記	VIC 映像 ID
8′17″		00：00 土方ビショップと二人で何かを話している　00：05 ？いやぁ、まぁもちろんそれは・・わかんないけど　00：09 ？黒、黒　00：11 ？おまえ、それは噛まれるぞ　00：14［吉岡］日曜の帰り、取れなかったんだよ？ああ、そうなんだ　00：18 ？月曜、休む、会社休んで　00：19 土方芦川とめくばせ　00：25 ？ゆっくり、明日も寝られる訳ですね　00：29 麿そうするといっぺん、この、波の上でうぇーと［見える］訳ですよね　00：35 ？ 13 日　00：36 ？吉岡さん、明日、羽黒山だもんね　00：38 吉岡羽黒山行って？夕方帰って来ますか　00：43 吉岡 13 ね、切符ね、帰りね、取んなきゃいけないと思ってさ、取ったの　00：52 麿吉岡さんも明日の［日本海］の［土左衛門］が見られるっていうことですよ　00：54 吉岡日曜はだめなのよ　00：58 松岡吉岡さん、明日、羽黒山登られるんですか？01：05 ？登るんですよね、吉岡さん ［吉岡］いやぁ・・せっかくここへ来たんだから・・いや、のぼるって・・　01：03 ？のぼるんですよね、吉岡さん？ 11 日、11 日、明日　01：08 吉岡いや、［市川］さんが言ってきたんだよ　01：13 ？・・・あのー、松山さんもいるから一緒に登って来たら？　01：18 松山僕は明日の 22 時に出るの。22 時にね、なん分に出るの。01：27 ？ここ終わってから？？終わってからですって（笑）　01：28 松山いや、いや、あの、その、汽車でね　01：32 ？あー、夜ね　01：33 松山そうよ　01：37 ？じゃあ明日一緒に・・　01：38 土方ビショップと何か話している（登山の会話には加わらず）　01：41 ？誰か一人　01：43［吉岡］だいたいだめなんだよ　01：45 松山途中であんまぐらいしますよ？笑01：50［吉岡］肩こっちゃったよ、今日　01：52 松山あぁ、今夜でもいいですよ　01：54［吉岡］あ、じゃあ・・・　01：57 松山僕のは［犬のあんま］だから　01：58［吉岡］すごいねー　02：02 ？・・・・生意気だなぁ02：04 松山立ち上がる　02：05 ？頂上まで行っちゃう・・ ［吉岡］あ、行っちゃうの？　02：06 土方知ってます？（手前の人物に向かって）02：10 ？ああ、じゃあそうしますよ　02：16 松山だって、泣くと録音されるから、これ　02：24 ？［森島］さんはね、昔、象使い・・	北方舞踏派による公演後の打ち上げの風景。	土方巽、ビショップ山田、松山俊太郎、麿赤兒、森繁哉、吉岡実、天児牛大、大須賀勇、田村哲郎、室伏鴻、玉野黄市、カメラマン、芦川羊子ほか	初日打ち上げ・続き	VIC_0091_北方舞踏派 No.9

塩首構成表②

北方舞踏派「塩首」						
1975年10月10日から三夜にわたり、山形県出羽三山の麓に所在するグラン・カメリオ舞踏場において「北方舞踏派結成記念公演」が催された。その前年、舞踏家のビショップ山田によって創設された舞踏塾に集った演者たちは、東北・北海道への巡回公演を経てこの度「北方舞踏派」を名乗ることとなったのであった。本映像はその記録の一部である。「カルミナ・ブラーナ」が流れる中で、地に伏せた大駱駝艦の舞踏手が身体を揺らしながら徐々に起き上がる様子、三味線の音色に合わせて北方舞踏派男性舞踏手が列をなす踊り、揺れる衣裳に身を包んだビショップ山田による軽やかな踊りなどが収録されている。						
分数	シーン	内容	ダンサー	音楽	注記	VIC映像ID
0′00″	開演前	00：00 〜 開場の様子。「こちら整理券です。」などの声が飛ぶ。 01：17 〜 開演前の観客。畳に規則正しく座っている。子供の姿、大家の斎藤さんも見える。 01：45 〜 開演前挨拶。北方舞踏派の成り立ちと、今回の公演の趣旨を語っている。				VIC_0086_10/10_北方shiokubi Oct9, 10 1975 No.4 本番①
2′20″	1-1	02：25 〜 暗闇の中、吹き荒れる風の音。落とし穴のように開いた穴から、ビショップが顔を出している。 上を見上げ、表情をぐにゃぐにゃと変える。立ち上がり、体の上半分が穴から見える。05：00 〜風の音が止む。 前方を指差したり、首に手を当てたりと表現をする（テクニカルチームへの合図含む）。拳を穴のふちに叩きつけ、穴から勢いよく出る。 音楽が数秒流れ、軽やかに動く。数歩あゆみ出て、また音楽が数秒流れ動く。体をこわばらせると、風の音が吹き始め、フェードアウトとともに体を折りたたむように穴に戻っていく。	ビショップ山田	風音		
8′14″	1-2	08：10 〜 地面から首だけを出し、ライトに照らされ、上方をにらみつける人物のアップ（小島）。左にパンすると穴から数人の首だけがのぞいている（南部、森、高橋、神南）。さらにカメラを周囲に振ると、点々と地面に首がさらされている（熊谷ほか北方舞踏派＋大須賀、室伏＋森）。壁から生えているようなものもある（田村）。 09：50 〜 音楽がかかり、穴の首たちが蠢いている。 10：35 〜 穴から森が首を出し、穴の周りでは、プラスチックの四角い板につぎはぎの布を垂らした盆を持った人物が4人演じている（右から蔵本、神南、南部、高橋）。「はっ」という声とともに、穴の中の森が飛び出し、しゃがんだまま頭に手を置き動き回る。頭には蟹が乗っている（森）。舞台左前方で飛び上がって正座をする。 四つん這いになり、獣のように歩いていく。右端まで来ると中腰になって「ぷるるるる」と叫びながら、4人の人物の後ろを走り抜ける。また左端まで来ると、4人の人物の頭にぎこちなく触れていく。すべて触れ終えると、4人の人物はゆっくりと後ずさり舞台奥に消えていく。森は、地面をたたき「みーんみんみん」と鳴く。ぎこちなく立ち上がってさまよう。舞台中央で転回をし、またさまよう。しばらく続いた後、体を大きく後ろにそらせ、後ずさりながら舞台奥に消えていく。	森繁哉、北方舞踏派（小島一郎、南部満、神南天翔、高橋光雄、蔵本悟、熊谷日和ほか女性舞踏手）、大駱駝艦（大須賀勇、田村哲郎、室伏鴻）	風音、ブライアン・イーノ？他		
33′53″	1-3	25：20 〜 肩から胸にかけて何かをまとった人物が5人（右から南部、小島、神南、蔵本、高橋）、正座をして横一列に並んでいる。体を振るわせ始め、徐々に大きくなっていく。手をばたつかせ、隣同士ぶつかり合っている。左端の人物が立ち上がって、ばたばたと動き回って寝転がり、また戻る。全員が、肩を縦に揺らしながら立ち上がる。 歌舞伎の見得のような構えをしながら、じりじりと前に進む。横に向き直ると、曲調が変わり、手足の関節が際立つ動きをする。徐々に縦一列になっていき、ひとつの塊のように動く。手を筒にして覗いていると曲が止まる。手足をばたつかせ、絡まりあい止まる。またばたつき、騎馬戦のように4人の上に一人が立つ。騎馬が崩れ、一人あるいは二人づつ、小さくマヤのポーズでしゃがみながら足を細かく動かして歩き回り散っていく。フェードアウトし、鐘の音が鳴る。 33：53 〜 映像終了。	北方舞踏派（小島一郎、南部満、神南天翔、高橋光雄、蔵本悟）	後藤治？、タンゴ？		
	2-1	0'00 暗転後、玉野布にくるまって背中を見せて板付。棺桶の台から下にずり落ちる。 2'15 穴に落ちる。暗転。2'34 穴から大きな鍔の帽子で出てくる玉野。4'20 帽子を脱ぎ、綿を被った玉野、種子のポーズ、振り向き、ゴヤの動き？ずり下がり穴に落ちる。暗転。　9'43 北方舞踏派男性5人、手を顔の前でピロピロさせながら登場。垂直でジャンプし、小さくなって走る。獣の動き、ユニゾンでいくつかのシークエンス、上下で悶え苦しんだ後にあっかんべ、背面を向けて腰を降る、ピロピロさせながら下前に移動、上へ移動して首切り、顔を伏せて小さくなる。18'11 穴から棒が見える。女が棒で床を叩く。男たちが音に反応する。20'02　男ががなっている。21'16 一人残り、仰向けになった男のアップ（小島）、雪が穴から棒を持って登場。男を棒で刺す。男と共にゆっくり穴にはけていく。暗転。25'03　うさぎの耳？	玉野黄市、北方舞踏派（小島一郎、南部満、神南天翔、高橋光雄、蔵本悟、雪雄子ほか女性）	ピンク・フロイド「タイム」、ドラム音、サイレン、鳥の声、後藤治？		VIC_0087_北方舞踏派 No.5 本番② 〜芦川

北方舞踏派「塩首」						
分数	シーン	内容	ダンサー	音楽	注記	VIC 映像 ID
33′51	2-2	25'20　芦川、末広を両手に持って板付。頭に御幣、股間に箒、末広を置いてゆっくり、立ち上がる。穴は板で塞いであり、その上に芦川は乗っている。立ったり、座ったりしながら、下にずり落ちてくる。その間舞踏譜の細かい踊り、ジャンプを数回繰り返し、再度台に戻り横になる。続けて、飛んだり、箒をかけたり、細かく繰り返しながらテンポの速い踊り。 33'51　映像終了	北方舞踏派（男性）、芦川羊子	バグパイプのアメージング・グレース		VIC_0087_北方舞踏派　No.5　本番②　～芦川
	3-1	0'00 北方舞踏派男 4 人がススキを持って、穴の周りにしゃがむ。芦川の着替えを隠している。　0'44 男たちがはけると赤子の芦川、しゃがんだまま坂を登っていく。曲 F.O し、ゆっくり暗転。　4'57 フェザーのついた扇子を持った芦川、着物ドレス、坂を降り、ゆっくり立ち上がる。扇子をひらつかせながら、音に合わせて倒れたりする。鳥、ビアズレー、蔓？ 中央に戻り、伏せ、暗転。	北方舞踏派（男性）、芦川羊子	動物の謝肉祭「白鳥」、途中 F.O フランスのシャンソン？		VIC_0088_北方舞踏派　No.6　芦川～北方本番③
33′29″	3-2	12'09 北方舞踏派（女性 4 人、雪、熊谷、大妻、秋本）頬の肉をつまんでいる。手を離し、ゆっくり前方へ進む。　15'49 民謡に変わり、後ろに立つ雪のアップ、左右に伸びる動きから、一列になり後ろ向きに倒れ込む。　17'58 振り向いて、客席に向けて大開脚、無音の中、足の下に手を入れる動き、足を閉じて揺らぐ。　22'26 再度中華風の曲イン、雪のアップ、立ち上がりながら、震える。下奥に向かい、腰をつき、はける。　27'25 北方舞踏派男性 3 人が顔を出し、舌を出して震える。先ほどはけた女性が棺桶の上に並び、お尻を出す。兵隊姿で紙を咥える森が下手に立つ。すっと消えて、棺桶の蓋が開いて中にいる大駱駝艦 5 人が登場。　28'27 背中を向け、動かない。少しづつ左右に揺れ始める。33'18　角をつけた牧神が斜めに倒れる。 33'29 映像終了	北方舞踏派（雪雄子、大妻たか、熊谷日和、秋本奈々子、男性）、大駱駝艦	中華風の曲、東根三階節		
	4-1	0'00 背面を向けたまま、激しく上半身を揺らす大駱駝艦 5 人。0'41 右回転で顔を見せると観客から拍手。右から室伏、天児、麿、大須賀、田村。正面に向き、順番に一人ずつ高く伸びる。5'58 棺桶から今にも飛び出ようとする 5 人。くるくる回転させた手を上に伸ばし、天井を仰ぎ見る。9'26 穴に 4 人が落ち込み、麿が中央に 1 人残る。暗転。10'04 津軽三味線が先行し、北方舞踏派男性が登場。舞台上手から背を低く屈めた演者が 5 名、右手に茶碗、左手に箸を持ち、観客の方に顔を向けている。中央の穴にはまだ大駱駝艦メンバーが顔を出している。最初のゆっくりと静かな平行移動とは打って変わり、途中からは三味線の軽やかな音色に合わせて小刻みに足腰を震わせながら、舞台中央に向かって連なって進み出る。大駱駝艦、はけ。13'25 一人、身を捩りながら群から離れる。その後を一人ずつ追っていく。中央で座り込み、寝そべり、速い動きのシークエンス。16'30 三味線 C.O 無音。お互いに噛みつきながら、後ろにじり下がる。穴にはけていき、暗転。 17'13　下手と上手に二人づつ分かれて、北方舞踏派男性、登場。ゆっくり下がり、暗転。	北方舞踏派（小島一郎、南部満、神南天翔、高橋光雄、蔵本悟）、大駱駝艦（麿赤児、室伏鴻、大須賀勇、天児牛大、田村哲郎）	カルミナ・ブラーナ、木田林松栄「津軽じょんがら節」		VIC_0089_《北方舞踏派　No.7　本番④　～ビショップ》（180912 19：30）
33′57″	4-2	17'38 暗転中に音楽先行。　18'11 棺桶の蓋が開き、ビショップ登場。観客から拍手。紐に捕まりながら、横たわる。20'07 下前から転がしが入り、フラマンのポーズ。20'58 無音の中、上体を起こし、腰掛ける。画面中央に映されたビショップが腰を低くして片手を顔先に掲げ、舞台上を跳ねながら前後に移動する。静かな会場には演者の足音と観客席からのシャッター音が鳴り響く。ビショップが舞台上手側にて腰に手をやり、ポーズを決めるとギターのメロディが響き始める。ドレスをひらめかせながら、舞台面を所狭しと駆け回る。25'46 曲の繰り返し、中央で立つビショップ。床に倒れ込み、再び立ち上がり、激しく踊り、再度中央で立つ。苦しげな表情の中、照明がゆっくり暗転。30'00 棺桶に首が並ぶ。中央に芦川。センターに立ち続けるビショップ。大きな風の音が響く。棺桶の蓋が閉まるのに合わせて、暗転。30'50 拍手。ビショップの首が映る。再度暗転。31'39 カーテンコール。和装の女性（斎藤）から花束を受け取るビショップ。	ビショップ山田、出演者全員	ホルスト・フィッシャー「ノートルダム」、エル・レリカリオ		

この構成表は Video Information Center 資料より 2017 年、2018 年、2020 年に 3 回にわたるデジタル化を行った際、および上映した際に再編されたリストにおけるビデオの内容記述を元にしている。
特に以下の 2 回において作成されたリストに、ビショップ山田氏へのインタビューなどを元に追記・修正を行った。
慶應義塾大学アート・センターの催事「KUAC Cinematheque 2 x『プリーツ・マシーン』1 号」（2018 年 10 月 1 日～ 12 月 14 日開催）
http://www.art-c.keio.ac.jp/news-events/event-archive/cinema2018/　（2023 年 6 月 12 日閲覧）
「中嶋興 /VIC を基軸としたビデオアート関連資料のデジタル化・レコード化Ⅰ」（http://www.art-c.keio.ac.jp/publication/reports-programs/vic-report-1/　2023 年 6 月 12 日閲覧）における 2020 年活動報告書（http://www.art-c.keio.ac.jp/site/assets/files/8824/210322.pdf　2023 年 6 月 12 日閲覧）

関連書誌（抄）：特に『塩首』に特化したもの.
阿部岩夫「異境の間をさまよう」『山形新聞』、1989 年 9 月（日付なし）。
天児牛大『重力との対話』岩波書店、2015 年。
天沢退二郎「北方舞踏派の『塩首』を見る」『アサヒグラフ』2724 号、1975 年 11 月、36-45 頁。
居島克嘉「稲穂の中の風魔一族」『アサヒグラフ』2714 号、1975 年 9 月、68-75 頁。
市川雅「遊芸と祭事の間で――北方舞踏派『塩首』」『見ることの距離――ダンスの軌跡 1962-1996』新書館、2000 年、94-101 頁。
一原有徳「女性舞踏集団〈鈴蘭党〉蜜から粉へ、そして粉からさらに」『美術手帖』34 巻 494 号、1982 年 3 月、152-157 頁。
岩淵啓介「小屋男一その想像力」『21ACT 通信』1980 年。
衛紀生「風を犯す渇き――北方舞踏派の助走」『新劇』22 巻 8 号、1975 年 8 月、72-83 頁。
香川弘夫「北のかなたへの儀式」『岩手日報』、1975 年 8 月（日付なし）。
木ノ内洋二「『北方舞踏派公演 酢爪坂―闇の手本―』酢の凝る方へ」『ダンス・ワーク』19 号、1977 年 1 月、42-43 頁。
――「余がまさなに古りし銀鈴――北方舞踏派公演『余がむざねに零りし銀鈴』を見て」『新劇　すべての劇的なるもののために』27 巻 8 号、1980 年 8 月、74-75 頁。
木下長宏「弥生の彼方へ」『北方舞踏派通信』創刊準備号、1985 年 6 月。
郡司正勝「死する北の舞踏」『郡司正勝刪定集 第四巻』白水社、1991 年。
小菅隼人「北に向かう身体をめぐって：舞踏家ビショップ山田に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』32 号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2017 年、27-78 頁。
――「漆黒の闇から純白の拡がりへ：舞踏家雪雄子に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』33 号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2018 年、35-77 頁。
――「北方舞踏派・鈴蘭党研究（1）：舞踏家緒環毘沙（長谷川希誉子）に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケション』53 号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2021 年、35-62 頁。
――「北方舞踏派・鈴蘭党研究（2）：舞踏家鈴木美紀子に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』37 号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2022 年、175-203 頁。
渋谷晴行「清列なポエジーの水脈」『北方舞踏派通信』創刊準備号、1985 年 6 月。
田中基「凍土の擦文舞踏へ」『夏至の眼』1979 年。
中川勇「肉体の反乱」『夏至の眼』1976 年。
長谷川六「飛蝗王」『秋田魅新聞』、1974 年（日付なし）。
土方巽「北方舞踏派に七面鳥を贈る」『美貌の青空』筑摩書房、1987 年、223-226 頁。
伏久田喬行「ビショップ・山田――異装するオリジン」『美術手帖』27 巻 401 号、1975 年 12 月、190-207 頁。
松岡正剛「北に舞い踏む者」『北方舞踏派通信』創刊準備号、1985 年 6 月。
松田修「女たちの変身回路」『現代詩手帖』20 巻 4 号、1977 年 4 月、48-52 頁。
――「畸型の奥の美」『日本読書新聞』、1981 年（日付なし）。
麿赤兒『完本　麿赤兒自伝――憂き世　戯れて候ふ』中央公論新社、2017 年。
室伏鴻『室伏鴻集成』河出書房新社、2018 年。
元藤燁子『土方巽とともに』筑摩書房、1990 年。
矢田卓「阿部家に極楽鳥を贈る」『写真世界』1975 年。
山田一平『ダンサー』太田出版、1992 年。
吉岡実「あがまつ頌」『ユリイカ』1975 年 12 月号、『サフラン摘み』に収録、青土社。
――「塩首」「あまがつ頌」『土方巽頌』筑摩書房、1987 年、86-94 頁。
吉行淳之介「〈おおー〉と風だるまが座敷に…東北人の訪問」『週刊読売』34 巻 15 号、1975 年 4 月、118-123 頁。
和田朔「北の肉体とは」『ダンス・ワーク』16 号、1976 年 3 月、58 頁。
――「『北方舞踏派公演 酢爪坂―闇の手本―』印象記」『ダンス・ワーク』19 号、1977 年 1 月、43 頁。
和田肇「北方舞踏派結成記念公演 塩首」『ダンス・ワーク』16 号、1976 年 3 月、56-57 頁。
Kosuge, Hayato. “The Expanding Universe of Butoh: the Challenge of Bishop Yamada in Hoppo Butoh-ha and *Shiokubi*, 1975, ” Bruce Baird and Rosemary Candelario (eds.), ***The Routledge Companion to Butoh Performance***, London: Routledge, 2018, pp.214-225.

【付記】この論考の基礎調査は、2021 年 8 月 12 日木曜日 13 時から 16 時、小菅隼人と石本華江がビショップ山田氏の自宅兼稽古場（山梨県甲斐市上福沢）を訪れ、ビショップ山田氏の全面協力のもとで、公演映像を見ながら聞き取りを行った作業が基になっている。その際、令和 3 年度科学研究費助

成事業「暗黒舞踏を芸術的カテゴリーとして確立するための実証的研究」（代表者：小菅隼人）の助成を受けた。また、本稿作成にあたっては、慶應義塾大学アート・センター設置・研究グループ「ポートフォリオ BUTOH」の助力を得た。